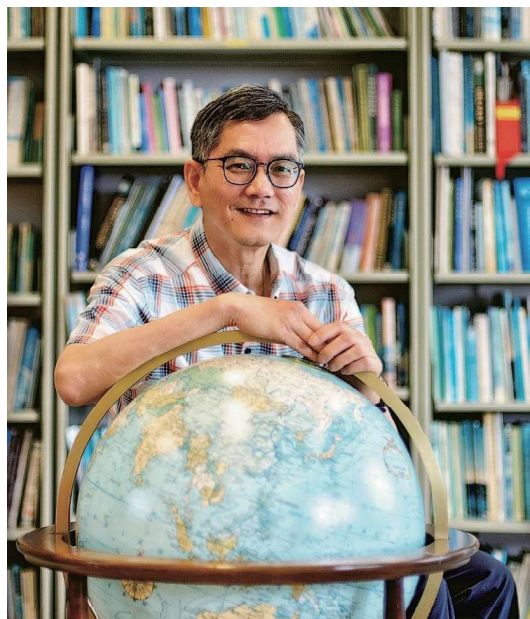


鄧永成教授を忘れない ——都市世界を啓発し続ける地理学者——

香港批判地理学グループ
リー ジョアンナ ワイン*
ソロモン ベンジャミン**
(森 正人*** 訳)



2018年5月 (写真出典: 明報)

2024年1月26日、鄧永成 Tang Wing-Shing 教授が71歳で逝去されたことで、私たちはみな、何十年もの間、真摯な学問的研究と社会的実践への直接的関与の両方の面で、この世界を啓発してきた都市地理学者を失った。香港に根を張り、香港批判地理学グループ (HKCGG) の創立会長でもあるウィンシンは、香港中文大学と香港バプティスト大学で教育と研究に生涯を捧げた。彼は数十年にわたり才能を育成し、知識生成の政治学を含む学術的理論化を推進した。彼の香港、中国、東アジア、そして国際的な学術界への貢献は、理論がいかに実践に役立つかを強調するものであった。誰もが知るように、ウィンシンは社会の変化の鋭い観察者であり、公正な社会のための実行可能な代替案オルタナティブに取り組んだ。私たちの世界を啓発した地理学者としての、この賢人、指導者、そして多くの人にとっての友人を失ったことは、

私たち全員に深い悲しみをもたらしている。私たちはウィンシン氏のご遺族に対して心より哀悼の意を表したい。

香港批判地理学グループは、ウィンシンの人生における重要な「社会的実践」プロジェクトだと考えられている。理論の世界を掘り下げ、社会正義の問題をじっくり考えることを通して、彼は都市への権利の代替案を模索した。2002年以降、彼はコーヒESHOPや大学の学部の903号室で定期的に読書会を開催してきた。2004年までに、ウィンシンは志を同じくする学生とともに香港批判地理学グループを正式に設立した。彼らは大学での世界についての読書会から、旺角、尖沙咀、深水埗、湾仔のコミュニティの探求へと活動の場を移した。香港批判地理学グループは学生や一般の人々のためにコミュニティ・ツアーを企画し、実践を通して知識を問い直したのだった。

それゆえ、香港批判地理学グループは、ウィンシンが多くコミュニティ、自然保護団体、社会福祉団体と協力するためのプラットフォームとしても機能した。都市生活の不平等と闘い、人間の尊厳を守ろうとする彼のアプローチは、特定の、状況づけられた諸歴史に繋がれた巧妙さと複雑さの理解を強調するものだった。彼は、都市の主流派の住宅事情の分析を実証するために、土地の複雑さと計画体制の政治性を中心に据えた。それによって、香港の現状と将来の展望に対する彼の積極的な関心は、香港以外の場所について考えるための、地に足のついた現実主義的な方法を切り開いたのである。退職後も、ウィンシンは香港の都市問題に対する全体的でユニークな洞察を提供しながら、精力的に執筆活動を続けた。彼の粘り強さと献身は、香港中の多くの人にインスピレーションを与えてきた。

ウィンシンの学問的研究は、都市地理学、香港の土地開発、空間理論、国家理論、中国における都市計画、歴史地理学に錨を下ろしていた。1973年にカナダに渡り、ウォータールー大学とマギル大学で

* 香港中文大学教員
** IIT マドラス教授
*** 三重大学教授

市地理学と経済地理学を学ぶ。1976年に首席で卒業し、カナダ地理学会から表彰された。都市・地域計画をさらに学ぶためにトロント大学に移り、1981年に著名な地理学者であるシュクリ・T・ロウイスとアレン・J・スコットの指導のもと修士号を取得した。修了後、香港大学で短期間、研究助手を務めた後、1982年にバプティスト・カレッジ¹の助講師となる。偶然にも中国の改革・開放と同じころに、ウィンシンは中国における都市化の特質、そして都市計画の特質に関する研究により、1986年にケンブリッジ大学で土地経済学の博士号を取得した。ドナルド・クロスとピーター・ノーランの指導下、毛沢東時代の中国の都市計画に彼は焦点を当てた。1989年に香港中文大学に講師として着任、1998年に香港バプティスト大学に助教授として着任した。2005年に准教授、2009年に教授に昇格し、2018年に退職した。不正義の空間への深い関与の中に置かれたこの土台こそが、彼の学問的キャリアを形成し、香港社会やより広い都市研究分野への学術的貢献を固めたのだった。

ウィンシンの唯物主義的アプローチは、第二次世界大戦後の資本主義的都市の発展傾向を人間社会と都市の本質として考察したトロント学派の計画理論に早くから影響を受けていた。彼は、土地の価値はすべての人の集合的貢献に完全に依存しており、現実には都市社会はさまざまな形態の社会空間的不平等を示しているという教えを認識していた。この認識により彼は、都市空間における力関係を精査し、都市計画をその支配や覇権を維持するための国家戦略やテクノクラシーとして批判することへ向かっていった。このことは、都市と土地の本質に関する理論的基礎を豊かにした。さらに、香港中文大学での10年にわたる研究期間で、ミシェル・フーコーの統治性の概念を含む、地理学的概念や西洋哲学とも関わることになった。その後、香港バプティスト大学でデイヴィッド・ハーヴェイやアンリ・ルフェーヴルの研究に関わることで、空間正義への理解が深まった。しかし、彼はそれらの限界も認識し、2000年代初頭からは、西洋／非西洋という二元的な視点を超えた批判的な都市理論を探求するようになった。このような関心は、中国、アジア、西洋の学問的発展の歴史を横断しての彼の探求をつなぎ留め、中国の都市研究における空間的視点に関する批評を加えたのだった。

ウィンシンの方法論である「空間物語」は、これら

の概念を支えるものであると同時に、きめ細かなフィールドに基づいた厳密さを基礎づけるものでもあった。これらは、理論構築の種別的な場としての香港島、九龍、新界における歴史的結合を反映している。それは空間的な理解を刷新し、歴史的、地理的な諸軌跡を注意深く整理するよう求めた。彼の「土地開発体制」という概念は、都市の土地や空間問題に対する一般的な見方に挑戦するものであった²。ウィンシンは香港の埋め立て、都市再生、ニュータウン、住宅開発を分析する基礎を築いた。このような状況づけられた厳密さによって、彼は「ジェントリフィケーション」や「新自由主義」のような、しばしば西洋から無作為に流用される支配的な概念を実質的に批判することができた。絡み合い、状況づけられた植民地時代の遺産を持つアジア諸都市の多様な発展の軌跡への関与。より近年では、この相互に埋め込まれた感覚／意味が、中国の「陰陽」をめぐるウィンシンの思考を形成し、非二元論的な、「通變」の知識に裏打ちされた空間論的方法論を発展させた。退職後、彼の出版物は、比較の不安に悩まされることなく、九龍やムンバイの場で探求された土地所有関係の繊細さと複雑さを介した土地の相互的埋め込みという物質性を通して、これらのアイデアを探るものだった。

「理論をもって実践に問いかけ、介入する」ことは、常にウィンシンの活動で前面に押し出されてきた。彼の独特な方法である「地区住民を介して都市を歩く」ことは、理論に集約されることになる厳密なフィールド調査の基盤を用意した。これらの理論化の場は、私たち全員——学生、メンバー、研究者仲間、そして道中で出会った一般の人や地元の住民たち——にとって今も忘れがたい思い出であり、インスピレーションであり、啓発である。彼とコミュニティ・ワーカーとの自然で自発的な会話は、彼らの長年にわたる深いつながりと友情を示していた。彼にとって都市とは抽象的なものではなく、このような人間同士のつながりから作られるものだった。社会的実践に触発されたウィンシンと彼の生徒たちは、「灣仔未来開発青図 Wan Chai Future Development Blueprint」、「灣仔コミュニティ・マッピング」、その他のコミュニティ・ネットワーク活動など、地域レベルで大きな影響をもたらす数多くのコミュニティ・プロジェクトに参加した。彼らは、都市の主流派と都市の貧困層に対する社会的関心を示しながら

1 香港バプティスト大学の前身校

2 土地開発体制については、鄧永成、葉鈞頌(2016)「土地開発体制主導下の高密度都市における香港住民の日常生活」(山田理絵子訳、全泓奎編『包摂都市を構想する 東アジアにおける実践』ページ92-103、京都：法律文化社)を参照のこと

ら、都市再生、都市計画、土地開発といった論争の的となる問題に取り組んだ。彼の実践は、学生や都市コミュニティと同時に、つねに幅広い研究に根ざしていた。2002年の天水圍「悲情城市」問題から2004年の囍帖街(ウェディング・カード・ストリート)の都市再生、2007年の中環のスターフェリーの乗り場と皇后埠頭(クイーンズ・ピア) [の取り壊し] から2010年の[広深港高速鉄道建設にともなう]菜園村と新界北東部[の立ち退き]まで、さまざまな場所での数多くのコミュニティ・フォーラムとともにあった——これらの関わりはすべて、香港の領域全体で学術的な実践の内省を芽生えさせたのだった。

学術的な遺産として、ウィンシンは何百人もの大学生を啓発しただけでなく、彼の香港の都市問題に関する、深く、地に足のついた研究を通して、より広範な国際的な都市研究や地理学のコミュニティに深い影響を与えた。多くの国際学術誌の編者や編集委員に招かれたことが示すように、国際的な学者たちはウィンシンを高く評価する。世界中の著名な大学に客員研究員や講演者として頻繁に招かれた。また、ウィンシンは、東アジア地域オルタナティブ地理学会議 (East Asia Regional Conference in Alternative Geography: EARCAG)、東アジア包摂都市ネットワーク (East-Asian Inclusive Cities Network)、国際批判的地理学グループ (International Critical Geography Group)、都市研究と行動のための国際ネットワーク (International Network for Urban Research and Action) への参加にも力を注いだ。これらのワークショップでは、講義室での理論に関するセッションと同じくらの時間(それ以上ではないにせよ)を都市の巡検に充てることで、フィールドに基づいた理論化に真剣に取り組んでいた。理論構築におけるこのような一体感は、会議室や講義室を超えて議論を広げたのだった。さらに、新界、九龍、湾仔では社会正義の現実性が異なるというように、[場所による]意味の差異の重要性も示していた。それゆえ、EARCAGは、土地、経済、社会正義の複雑な状況をきちんと考えるというウィンシンの主張によって形成されたもので、[東アジアだけでなく]非東アジアの学術的コミュニティにとって[も]重要であった。領域的あるいは地域的こだわりよりもむしろ、これらの会議はこのように、批判的な対話の場のために発展してきたのである。

ウィンシンは香港で生まれ育った。家族と学生た

ちを深く愛し、世界中の研究者や友人たちから広く尊敬され、称賛されていた。2024年1月26日、彼は家族と親しい友人たちに囲まれ、静かにこの世を去った。「私はあなたを混乱させたい」と彼がしばしば言っていたように、ウィンシンの知的刺激に私たちは深い感謝を捧げている。ウィンシンは、世界は先入観に満ちていると私たちに伝えようとした。彼はどんな質問にも明確な答えを決して与えることがなかったが、にもかかわらず彼の学生であり弟子である私たちは、彼の隣で喜びをもって沈思し、実践したものだ。教師として、友人として、ウィンシンは私たちの学問と人生の旅路を導いてくれた素晴らしき伴走者であった。私たちは彼の願いと物の見方を押し広げ、それぞれの仕事で彼の教えを伝えていこうと思う。彼の教え、実践、啓発、寛大さ、そして学術界と社会への知的貢献は、いつまでも忘れられることはないだろう。

ネイティブ・インク・イン・ザ・シティ・オブ・ホンコン
您的精神會與這個城市這個土地同在

(あなたの魂はこの街とこの土地とともにある)

あなたはいつも私たちとともに、この街とこの土地とともにいる。

ご遺族、HKBU地理学科発行の追悼文は以下のリンクも閲覧して欲しい。

1. 家族の追悼文と葬儀の情報

In Loving Memory of Professor Tang Wing Shing
<https://bit.ly/in-memory-of-prof-tang-wing-shing>

2. 香港バプティスト大学地理学科

In Memoriam - Professor Tang Wing Shing
<https://geog.hkbu.edu.hk/upload/files/1/file/65bb3b06701f.pdf>

スペースの都合上、関連写真は、英語版の終わりに掲載している。

3 天水圍の悲情城市については、鄧永成 (2009) 「天水圍：「虧」 どうしてこの一文字で表現することができようか？」URP GCOE Working Paper Series No.3 (中岡深雪訳) (https://www.ur-plaza.osaka-cu.ac.jp/wp1/wp-content/uploads/2016/06/GCOE_WorkingPaper_3.pdf) を参照のこと

In Memory of Professor Tang Wing-Shing: A Geographer Enlightening Urban Worlds

**Hong Kong Critical Geography Group,
Joanna Wai Ying LEE*, Solomon BENJAMIN****

(Originally, there was a photo of Wing Shing posted here, but due to space constraints, it is only included in the Japanese version.)

With the passing of Professor Tang Wing-Shing on January 26, 2024, at the age of 71, we have all lost an urban geographer who, for decades, has enlightened the world in both serious academic work as well as direct involvement in social practices. Located in Hong Kong, and founding chairman of the Hong Kong Critical Geography Group (HKCGG), WIng-Shing dedicated his life to teaching and researching at both the Chinese University of Hong Kong (CUHK) and Hong Kong Baptist University (HKBU). He nurtured talents for decades, advancing academic theorisation, including the politics of knowledge generation. His contributions to Hong Kong, China, East Asia, as well as the international academic community emphasised how theory could inform practices. Wing-Shing, as he was known to all, was a keen observer of societal changes and engaged with viable alternatives for a just society. As a geographer who enlightened our worlds, the loss of this wise man, mentor, and friend to many, deeply saddens us all. We extend our heartfelt condolences to Wing-Shing's family.

HKCGG is considered a significant 'social practice' project in Wing-Shing's life. Through delving into the worlds of theory and contemplating social justice issues, he sought alternatives for the right to the city. Since 2002, he had regularly organised reading groups in coffee shops and meeting room 903 at the department. By 2004, Wing-Shing had officially established the HKCGG along with like-minded students. Together, they moved from the university reading about the world to exploring communities in Mong Kok, Tsim Sha Tsui, Sham Shui Po and Wan Chai. The HKCGG organised community tours for students and the public, interrogating knowledge through practices.

HKCGG thus also served as a platform for Wing-Shing to collaborate with numerous community, conser-

vation and social welfare groups. His approach, striving to fight against the inequalities of urban life and defend human dignity, was to emphasise the understanding of subtlety and complexity anchored in particular, situated histories. He centred on the complexity of land and the politics of planning regimes to underpin the analysis of housing conditions for the urban majority. By doing so, his active attention to Hong Kong's current affairs and future prospects opened a grounded and realistic way to think about places elsewhere, beyond Hong Kong. Even after retirement, Wing-Shing continued to write prolifically, offering holistic and unique insights into Hong Kong's urban problems. His perseverance and dedication have inspired many across the city.

Wing-Shing's academic scholarship was anchored in urban geography, Hong Kong's land development, spatial theory, state theory, urban planning in China and historical geography. In 1973 he went to Canada to the University of Waterloo and McGill University, in order to study urban and economic geography. He graduated with first-class honours in 1976 and was recognized by the Canadian Association of Geographers. Moving to the University of Toronto for further studies in urban and regional planning, and he earned his master's degree in 1981 under the supervision of influential geographers Shoukry T. Roweis and Allen J. Scott. After graduation, Wing-Shing briefly worked as a research assistant at the University of Hong Kong before becoming an assistant lecturer at the Baptist College in 1982. Coinciding with China's reform and international opening, Wing-Shing's study of the nature of urbanisation in China and of urban planning led him to pursue a Ph.D. in land economics at the University of Cambridge in 1986. Working under the supervision of Donald Cross and Peter Nolan, he focused on Chinese urban planning in the Maoist era. Wing-Shing joined CUHK as a lecturer in 1989, then HKBU as an assistant professor in 1998. He was promoted to associate professor in 2005 and to professor in 2009, retiring with honours in 2018. It is this foundation

* Professional Consultant, The Chinese University of Hong Kong

** Professor, IIT Madras

in deep engagement with spaces of injustice that shaped his academic career and substantiated his academic contributions to Hong Kong society and the wider fields of urban studies.

Wing-Shing's materialist approach was informed early on by the Toronto school of planning theory, which reflected on the post-war capitalist city's development trends as an essence of human societies and cities. He realised the precept that land value is entirely reliant on the collective contributions of all, and that in reality, urban societies exhibit various forms of socio-spatial inequality. This realisation drove him to investigate power relations in urban space and to criticise urban planning as a state strategy and technocracy, to maintain its domination and hegemony. This enriched theoretical foundations about the very nature of the urban and of land. Furthermore, he engaged with geographical concepts and Western philosophy, including Michel Foucault's concept of governmentality, during his decade-long work in CUHK. Later at HKBU, his engagement with the works of David Harvey and Henri Lefebvre deepened his understanding of spatial justice. However, he also recognized their limitations, and from the early 2000s, explored critical urban theories that transcended binary perspectives of Western/non-Western. These concerns anchored his explorations across the history of disciplinary development of China, Asia, and the West to critics on the spatial perspective in Chinese urban research literature.

Wing-Shing's methodology, 'Spatial Stories', anchored these concepts but also grounded fine-grained, field-based rigour. These reflected historical conjunctions within Hong Kong Island, Kowloon and the New Territories as specific sites of theory building. It renewed spatial understandings and called for careful sorting through historical and geographical trajectories. His concept of 'Land (Re)Development Regime' challenged popular perspectives on urban land and spatial issues. Wing-Shing laid the ground to analyse Hong Kong's land reclamation, urban renewal, new towns and housing development. Such situated rigour allowed him to substantively criticise dominant concepts like 'gentrification' and 'neoliberalism' often randomly appropriated from the West. His engagement with varied developmental trajectories of Asian cities of entangled and situated colonial legacies. In more recent years, this sense of being mutually embedded shaped Wing-

Shing's thoughts around the Chinese 'yin-yang' to develop a non-dualist, tongbian-informed spatial methodology. Post retirement, his publications explored these ideas via the materiality of land's mutual embeddedness via the subtlety and complexity of property relations explored across Kowloon and sites in Mumbai, without being bounded by comparative anxieties.

'Interrogating and intervening in practice with theory' had always been at the forefront of Wing-Shing's work. His unique method of 'walking in the city through its neighbourhoods' set the ground for rigorous field investigation distilled into theories. These sites of theorisation remain unforgettable memories, inspirations and enlightenment to all of us: students, members, fellow academics, also ordinary people and kaifong (local residents) whom we met along the way. His spontaneous conversations with community workers showed their deep, long-standing connections and friendship. The city, for him, was not an abstraction, but built out of such human connections. Inspired by social practice, Wing-Shing and his students participated in numerous community projects that brought profound impacts at the local level, such as the 'Wan Chai Future Development Blueprint', 'Wan Chai Community Mapping', and other community networking work. They engaged in controversial issues like urban renewal, urban planning and land development, demonstrating social concern for the urban majority and urban poor. His praxis was always rooted in broader research, as well as the student and urban community. From the 2002 Tin Shui Wai 'City of Sadness' issue to the 2004 Wedding Card Street urban renewal, from the 2007 Central Star Ferry and Queen's Pier to the 2010 Choi Yuen Village and Northeast New Territories, along with numerous community forums in different places: all of these engagements sprouted academic-praxis reflection throughout the territory of Hong Kong.

As an academic legacy, Wing-Shing not only enlightened hundreds of university students, but also has profoundly influenced the wider international urban studies and geography community through his deep and grounded research on Hong Kong's urban issues. International scholars hold Wing-Shing in high esteem, reflected in invitations to serve as editor, or as editorial board member of many international academic journals. He was frequently invited as a visiting scholar or speaker to numerous renowned universities around the

world. Wing-Shing also dedicated himself to participating in the East Asia Regional Conference in Alternative Geography (EARCAG), the East-Asian Inclusive Cities Network, the International Critical Geography Group, and the International Network for Urban Research and Action. These workshops took seriously field based theorisation by allocating for the city tours, the same time, (if not even more) as the in class theory sessions. Such togetherness in theory building extended discussions beyond the conference rooms and classrooms. It also illustrated the importance of nuance, wherein the actuality of social justice would differ from the New Territories to Kowloon to Wanchai. EARCAG was thus important for the non-East Asian academic community, shaped largely by Wing Shing's insistence on the serious consideration of situated complexities of land, economy and social justice. Rather than a territorial or area-based obsession, these meetings were thus formative for critical dialogically sites.

Wing-Shing was born and raised in Hong Kong. He loved his family and students dearly and was widely respected and admired by scholars and friends around the world. On January 26, 2024, he passed away peacefully surrounded by his family and closest friends. We are profoundly grateful for Wing Shing's intellectual inspiration, just as he often said, 'I want to confuse you'. Wing Shing wanted to tell us that the world is full of preconceptions. He never gave us definite answers to any questions, yet we, his students, joyfully pondered and practised by his side. As both a teacher and a friend,

Wing-Shing was our great companion who guided us through our academic and life journeys. We will extend his aspirations and visions, and pass on his teachings in our respective professions. His teaching, practice, enlightenment, generosity and intellectual contributions to academia and society will always be remembered.

Nei dik jing san wui yu je go sing si je pin tou dei tung joi
您的精神會與這個城市這片土地同在

You will always be with us, with this city and this land.

Please also read the links below for the obituaries issued by the family, the Department of Geography of HKBU:

1. Family obituary & funeral information:
In Loving Memory of Professor Tang Wing Shing
<https://bit.ly/in-memory-of-prof-tang-wing-shing>
2. Department of Geography, Hong Kong Baptist University:
In Memoriam - Professor Tang Wing Shing
<https://geog.hkbu.edu.hk/upload/files/1/file/65bb3b06701ff.pdf>

編集注

本稿の内容は、HKCGGのホームページ (<https://hkegg.wordpress.com>)にも掲載されている。



スターフェリー埠頭の取り壊しに反対する人民フォーラムで発言するウィンシン
2006年12月16日 (KK Wong 撮影)

Wing-Shing speaking at the People's Forum against the demolition of Star Ferry Pier
16 December 2006 (Photo Credit: KK Wong)

悼念鄧永成教授 經世啟蒙的地理學家

香港批判地理學會、李慧瑩*

香港城市地理學家、香港批判地理學會創會主席鄧永成教授於2024年1月26日與世長辭，享壽71歲。鄧教授畢生從事地理學教研工作，先後任教於香港中文大學及香港浸會大學，作育英才數十載，致力推動學術理論發展，貢獻香港、中國、東亞以至國際學術界。他更將理論付諸實行，一直洞察社會轉變，尤其關心社會弱勢，為城市社會更好的未來提出建議，是一位經世啟蒙的地理學家。痛失這位智者、恩師、好友，本會深感哀痛，並向鄧教授家人致以深切慰問。

香港批判地理學會 (Hong Kong Critical Geography Group) 是鄧教授生命中相當重要的社會實踐計劃，透過走進理論世界，思索社會公義問題，為城市尋找他選。由2002年起定期舉辦讀書組，到2004年正式創立學會，鄧教授與志同道合的學生和友人，從在浸會大學903會議室、咖啡廳中閱讀世界，到走進旺角、尖沙嘴、深水埗等社區空間，為公眾及學生舉辦城市導賞團等，追求知識結合實踐，以獨特的田野考察，為會內外的參與者帶來畢生難忘的啟蒙。學會亦是鄧教授與不少保育及社福團體合作的平台，推動改善城市生活質素，尤其關注弱勢的住屋狀況和社會公義議題，積極關注香港的現狀及未來。榮休後，鄧教授仍筆耕不斷，為香港城市問題帶來宏觀而獨到的觀察，其毅力和堅持叫人欽佩。

鄧教授一生專注經營學術知識，其研究興趣橫跨城市地理學、香港土地發展、城市空間理論、中國城市規劃、歷史地理學等範疇。回顧鄧教授精彩的學術成長生涯，他在1973年負笈加拿大，先後於滑鐵盧大學及麥基爾大學修讀城市及經濟地理學，在1976年以一級榮譽畢業，獲加拿大地理學家學會嘉許。他隨後獲多倫多大學取錄，深造城市及區域規劃，師承 Shoukry T. Roweis 和 Allen J. Scott 兩位影響他一生的著名城市地理學家，並在1981年取得碩士學位。畢業後，鄧教授回港短暫任職香港大學研究助理，後於1982年加入香港浸會學院地理系擔任助理講師。時值中國改革開放，鄧教授期望出一分力，研究中國城市化的本質和城市規劃，故在1986年再次負笈英國，到劍橋大學土地經濟系修讀博士學位，師從 Donald Cross 和 Peter Nolan 教授，最終完成關於

當代中國城市規劃的博士論文。鄧教授在1989年加入香港中文大學地理系擔任講師，1998年再次加入香港浸會大學地理系擔任助理教授，於2005年升任副教授、2009年晉升為教授，至2018年榮休。

我們無法忘記鄧教授在各方面為香港社會及地理學界帶來的學術貢獻。

在思想上，早年受多倫多規劃理論學派的啟蒙，鄧教授深刻反思戰後資本主義城市的發展趨勢、認識人類社會和城市的本質，尤其了解到土地價值全賴社會大眾的集體貢獻，但現實中城市社會存在各種分配不平等的狀況，驅使他著力探究城市空間的政治權力關係，反思城市規劃作為一種規管及調和城市空間政治的技術手段等，豐富了城市土地本質的理論基礎。他沿用 Michel Foucault、Henri Lefebvre 及 David Harvey 等西方思想家的理論，加深對這些城市問題的認識，也同時意識到西方思想的局限，故他多年來一直研究人文地理學的方法論和歷史，嘗試超越西方/非西方的二元對立，疏理中國、亞洲和西方的學科發展歷程，評述中國城市研究文獻的空間視角。

在知識層面上，鄧教授發展出「空間故事」的方法論，試圖透過疏理歷史地理脈絡，探知一種新的空間認識和理解，挑戰既有對於城市土地及空間問題的看法。他用他的「土地發展體制」理論 (Land (Re) Development Regime) 剖析香港的填海、城市重建和新市鎮發展，亦拒絕以「土紳化」等現成概念粗疏地將現況歸類，近年更醉心於結合中國易經思想和地理學的空間視角。他將這個方法論套用於比較亞洲及歐洲城市的發展歷程，重要成果在其榮休後陸續出版。

「用理論介入實踐」是鄧教授念茲在茲的工作。在社區實踐方面，他和學生一同參與眾多為城市發展帶來改變的項目，例如灣仔未來發展藍圖、灣仔社區地圖集等研究發佈，結合知識與實踐，參與市區重建、在地規劃、香港土地發展等關鍵課題，展現對城市弱勢的社會關懷。香港過去20年間的社會發展，無不有關心城市議題的批判地理學會師生關注和參與，從2002年天水圍悲情城市的議題到2004年蘭帖街重建，從2007年天星碼頭到2010年菜園村、新界東北，再加上多次不同地方的社區論壇，鄧教授的實踐在香港的

* 香港中文大學專業顧問

土地上不斷生根發芽。

學術傳承方面，鄧教授不僅啟蒙了中文大學與浸會大學十多位門生及眾多學生，更為城市地理學界及香港城市問題研究帶來深刻影響。國際學者亦對鄧教授推崇備至，邀請其擔任不少國際學術期刊的編輯或編委會成員，並受邀到世界多所知名大學擔任訪問學者。鄧教授也一直致力參與另類地理學東亞會議、東亞包容城市網絡、國際批判地理學會和國際城市研究及行動網絡的工作。

鄧永成教授生於香港、長於香港，他疼愛家人、學生，學者友好相識滿天下，深受愛戴。2024年1月26日，他在最親近的家人、友人和學生陪伴下安詳離世。我們相當感激鄧教授對我們的啟蒙，正如他經常所言：「要 confuse 你們」。鄧教授從來想告訴我們的，是這個世界有太多既定思維、太多僵化的權力，他從來都沒有告訴我們任何問題的既定答案，而我們這些學生卻在他身邊樂此不疲的思索和實踐。鄧老師是我們在學術和人生路上一位亦師亦友的同行者，我們將在各自的專業中延續著您的生命和志願。您的授業解惑、身體力行、無私啟迪、對學術及社會的貢獻，我們永誌不忘。

您的精神，會與這個城市、這片土地同在。

香港批判地理學會

<https://www.facebook.com/HKCGG>

<https://hkcg.wordpress.com/>

編集注

本稿の内容は、HKCGGのホームページ (<https://hkcg.wordpress.com>)にも掲載されている。